

## カミカゼという不潔な言葉

㊦ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

ちょっと話題を変えて、言葉の清潔・不潔を問題にしようと思う。以前にも、フランスで「モンゴリアン」という言葉がダウン症患者の意味で使われていることを書いたが、今回は、カミカゼという言葉の使い方が問題である。

ご存知だろうか。日本ではニュースなどで「自爆テロ」という言葉を使っているが、フランスではもっぱら「カミカゼ」という言い方をしている。正確に言えば「カミカーズ」だが、これはフランス語風に「神風」を発音したものだ。

私は何年かパリで暮らしていたので、フランスでの事情については断言できるが、他の国ではどういう言い方がされているのかよく知らない。

多分ラテン系言語の国、スペインやイタリアでは同じであろう。ドイツ語や英語圏ではどうか、ご存知の方には教えてほしいのだが、とにかく、世界の多くの国々で、私たちが「自爆テロ」と呼んでいる卑劣な行為を表現するために、「カミカゼ」という言葉を使っていることは事実である。

私は、昨年の末までフランスにいたが、「カミカーズ」という言葉が聞こえてくるたびに実にイヤな気がしたものである。

日本語の「神風」がこんな誤った意味で盛んに使われ始めたのは、2001年9月11日のニューヨーク・テロ事件以来のことである。

それまでは、乱暴なタクシーを「カミカゼ・タクシー」と呼んだ日本での流行が、そのままフランスでも通用したことはあったが、「自爆」ということが特に意識されたことは無かったように思う。

ところが、あの9.11の事件のあと、フランスで最初に報道された政治家の言葉は、「これは最悪のパールハーバーだ」というものだった。フランス民主主義連合(UDF)党首バイルーの発言である。

そして、奇妙なことに、テレビでの9.11ニュース報道に続いて、必ずと言ってよいほど日本軍の真珠湾攻撃のフィルムが映されるようになった。これは、9.11の最初の報道があった直後からそうなのだからオドロキだ。

フランスの主要なテレビ局はすべて国営なので、しばらくはどの局でも符丁を合わせたように、9.11報道があるたびに、同時に真珠湾攻撃のシーンを放映するようになった。

日本の真珠湾攻撃は、何と言っても、国際法上正当とされている戦争行為であり、攻撃の対象は軍事基地であった。それを、無差別に民間人を殺戮するテロ行為と一緒にされてはかなわないのだが、フランス・テレビ局の偏見はそれだけに止まらなかった。

自爆によるテロ行為を、神風特攻隊の戦法と同一視したのである。特攻隊については、国家の責任など歴史的な意味づけに関して多くの問題が残されてはいるものの、これ自体は決して犯罪ではない。

戦争の末期にあつて、戦闘手段の枯渇した国家のために兵士が身を挺して戦うという、きわめて英雄的な行為である。

こういう自己犠牲は、特攻隊に限らず、多くの戦場で見られる行為であり、目的の是非はともかく、それ自体としては愛国心の発露として讃えられても良い行為であろう。その後押しをするものが、「神風」という正義感であった。

自分たちの正義は、神風によって守られている。自分たちが正しいことは、いずれ神の風が吹くことによって証明される、と日本人は考えていた。

「かくて神風が吹く」という蒙古来襲をテーマにした映画が戦時中上映された。神が国家を守り、国家の正義の証となり、国家を救うという思想のシンボルになったものが、「神風」という言葉である。

そういう日本語独自の意味を無視して、フランスのマスコミが一斉に「カミカゼ」という言葉を「自爆テロ」の意味で使い始めたのだ。

9. 11の翌日、つまり9月12日に、この事件の特集を組んだフランス・ドゥーは、その報道番組を始めるにあたって「東京の20年」というドキュメントをわざわざ挿入したのだ。

このフィルムの後には、渋谷のナイトクラブで演じられた劇の一場面が出てくる。それは神風特攻隊の出撃を表したもので、舞台の上に吊された大きな戦闘機の模型が空に舞い上がっていく場面だった。

これが終わると、真珠湾を攻撃する日本空軍の記録フィルムが映され、続いてコマーシャルなしに、直接9. 11テロ事件の報道番組へと移行する。まさに、過去のパールハーバーがイントロになって、現代のニューヨークテロにつながったという構成だ。

フランスでも、最初から「カミカゼ」という語ばかり使っていたわけではなかった。最初は、いくぶん遠慮がちに「自殺飛行機」とか「自爆機」などという言い方もしていたのである。それがしだいに「カミカゼ」を使うことが多くなり、今では「自爆テロ」の代名詞にまでなっている。

日本人として、こういう事態に無関心でいられないのは当然であろう。私は、日本の代表的な新聞社や雑誌社にメールを送ったり、日本大使館に電話を入れたりして、フランス・メディアへの適切な対応を願ったのであるが、すべては徒労に終わった。市井の一個人の声など歯牙にも掛けてもらえないのが現実である。

しかし、あの時、日本の政府やメディアが、諸外国に対して少しでも意思表示をしておいたなら、私たちの大切な言葉が「自爆テロ」の代名詞のように使われる事態は避けられたのではないだろうか。

だが、所詮はそんなこと望めないのが日本の社会なのかも知れない。9. 11の第一報を載せた朝日新聞衛星版を見て、私は啞然とさせられた。

四人の評論家がこの事件に対する意見を寄せていたが、そのうちの二人が、この事件は「旧日本軍の特攻を思わせる」と書いていたからである。「最悪のパールハーバーだ」と言ったバイルーと二十歩百歩ではないか。

こういう人たちが、意味も判らずに言葉を濫用し、言葉を不潔なものに変えていってしまうのだ。これでは、特攻隊として祖国に命を捧げた人々に対する冒瀆ではないか。

私はいま、言葉の清潔・不潔ということを問題にしているのであるが、言葉そのものは単なる記号であって、そこには善悪も無ければ、キレイ・キタナイも無い。

言葉の清潔・不潔を決めてしまうのは、その使い方なのである。差別用語と言われるものも同様である。言葉そのものには価値観は無い。それをどのような状況で、誰に向かって用いるかで差別が生じる。

そのようなわけで、私たちが自国の言語の使い方について抗議するのは正当であろう。日本語から勝手に盗用し、意味を歪め、意味を汚して使われた言葉を、本来の場所に戻し、本来の意味を取り戻させることに、私たちはもう少し真剣になっても良かったのではないだろうか。

[2007/11/07 magmag]